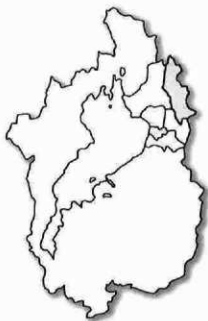


上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅲ

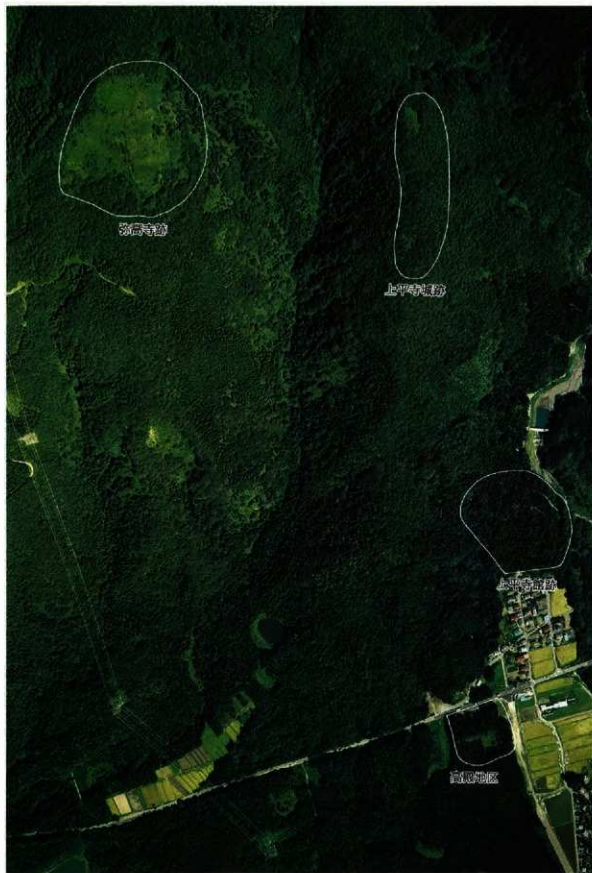
じょう へい じ じょう あと
上 平 寺 城 跡

—京極氏の山城跡—



2002. 3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会



上平寺城跡遺跡群 空撮

序

近くに日本地図があれば開いてご覧ください。本州で最も狭い地域は、北から若狭湾が迫り、南には伊勢湾が入り込む、滋賀・岐阜の県境付近です。その中心に伊吹山が大きくそびえています。ここに、古代から現代まで主要な交通路が集中し、東日本と西日本の自然・文化・歴史の十字路として、さまざまなものが行き交ってきました。

山麓からたくさん出土している縄文時代の石棒や石剣などの不思議な石器や、山頂から出土している矢じりは、伊吹山に対する原始信仰の産物です。また、ヤマトタケル伝承の荒ぶる神に代表されるように、伊吹山は古代より神の住む山でした。奈良時代には、この山岳信仰と仏教信仰が交じりあい山岳仏教が成立します。伊吹山は天下の七高山の一つとなり修験道の霊場として栄え、尾根上に多くの社寺が建立されました。

今回測量調査をおこなった上平寺城跡は、伊吹山から南へ派生する尾根上標高約690mの地点にあります。山麓には庭園遺構が良好に残る上平寺館跡があり、西側の尾根上には、典型的な山岳寺院の構造を見ることができる弥高寺跡があります。

このように、伊吹山麓南麓一帯には、山城・居館・庭園・山岳寺院などの中世遺跡が展開しており、これらを結ぶ山の道があります。また、地元では遺跡を活かしたまちづくりが模索されはじめ、登城道の整備や看板の設置、関連地域との交流会などが進められています。

この報告書は、まちづくりや遺跡の保護のための基礎資料として作成しました。調査に際して、地元弥高区をはじめ、上平寺区・大原財産区など、関係各位に多くのご理解とご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

伊吹町教育委員会

教育長 松 嵐 膽 龍

例 言

1. 本書は、文化庁・滋賀県の補助をうけ、国庫補助事業として実施した、滋賀県坂田郡伊吹町における上平寺城跡遺跡群分布調査事業のうち、大字弥高・大字藤川地先の上平寺城跡の調査報告書である。
2. 本調査は、平成12年度から平成13年度に伊吹町教育委員会が滋賀県教育委員会の指導・助言を得て実施した。引き続き、弥高寺跡と関連遺跡の調査を計画している。
3. 調査は、伊吹町教育委員会生涯学習課主任高橋順之が担当した。なお、調査体制は下記の通りである。

調査主体	伊吹町教育委員会 教育長 石河竹二郎（～平成12年10月） 松 嘉 隆 龍（平成12年11月～）
調査事務局	伊吹町教育委員会 生涯学習課
課 長	伊富貴孝司（平成12年度） 山 崎 完 一（平成13年度）
課長補佐	高 橋 兵 太
係 長	大 澤 信 悟
主 事	石 河 輝 男（平成12年度） 伊 藤 彰 浩（平成13年度）
作 業 員	的 場 育 代 安 田 郁 子 山 壽 仁 生 山 崎 正 文 松 尾 武 幸 多 賀 兼

4. 調査にあたって、次の方々からご指導・ご助言・ご協力をいただいた。厚く感謝の意を表す次第です。（敬称略・順不同）
中井 均・桂田峰男・宮崎幹也・土井一行・山崎清和・山壽仁生・中辻英雄（平成12年度弥高区長）・内川 孝（平成13年度弥高区長）・堀田克己（大原財産区組合長）
5. 上平寺城跡の地形測量には、本庄設計株式会社の協力を得た。
6. 本書の執筆は、第5章は米原町教育委員会・中井 均氏に玉稿を賜った。他は高橋が執筆・編集した。

目 次

序

例言

第1章	遺跡の位置と歴史的環境	2
第2章	調査の経緯	6
第3章	調査の結果	7
第4章	まとめにかえて 一京極氏の居城と上平寺城の位置付け一	10
第5章	付 論 上平寺城跡の構造 一特に元龜元年の改修を中心に一	16

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	弥高寺跡平面図	3
第3図	周辺の中世城郭分布図	4
第4図	上平寺城跡測量図	8
第5図	京極氏系図	9
第6図	柏原城跡地形図	11
第7図	勝楽寺城跡縄張図	12
第8図	上平寺城跡縄張図の変遷	17
第9図	尾根先端に連続堀切をもつ事例	23

写真目次

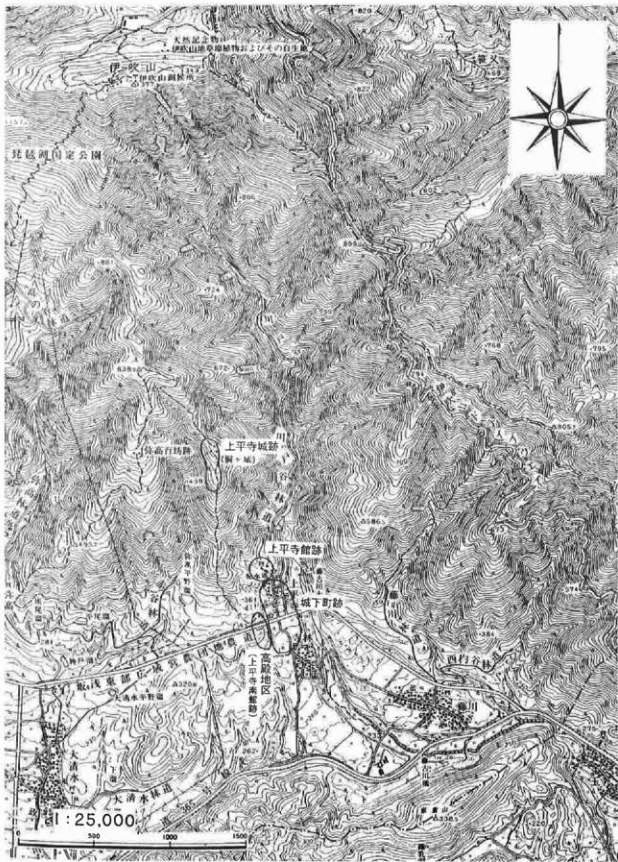
写真1	上平寺城絵図（山城部分）	2
-----	--------------	---

表目次

表1	京極氏関連年表	14
----	---------	----

図版目次

- 巻頭図版 上平寺城跡遺跡群空撮
- 図版 1 上平寺城跡遠景（藤川から）
上平寺城跡遠景（大清水から）
上平寺城跡遠景（弥高寺跡から）
- 図版 2 主郭 I（南から）・帯郭 II
- 図版 3 曲輪 IV・虎口 A
- 図版 4 曲輪 VII・堀切ア（土橋）
- 図版 5 堅堀イ・堀切オ
- 図版 6 城道あ・堅堀カ



第1図 遺跡位置図

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

坂田郡伊吹町は滋賀県の北東端に位置し、東は岐阜県不破郡関ヶ原町・同県掛斐郡春日村、北は掛斐郡坂内村に接する。西と南は滋賀県東浅井郡浅井町と坂田郡山東町に接する。この地域は、東日本と西日本の境界にあたり、今日まで交通の要衝としての役割をはたしてきた地域である。伊吹町は、滋賀・岐阜両県の県境をなす伊吹山（標高1377m）の山麓と、伊吹山地北部に端を発する姉川の峡谷部に広がる農山村である。

伊吹山南麓部地域には、中世に北近江を支配した京極氏に関連する遺跡が集中している。京極高清が15世紀末から16世紀初頭に整備した、京極氏の館や庭園を中心とする上平寺館跡、家臣屋敷が集中する高殿地区（遺跡名：上平寺南館跡）、戦時の詰めの城・上平寺城跡（菊安城・桐ヶ城）などの城館遺跡と、これらに伴う城下町跡や寺院跡などで、今回の分布調査では「上平寺城跡遺跡群」と総称して調査を進めている。また、ここから、直線距離で5km南には、京極家の菩提寺・清滝寺徳源院や柏原館（山東町）があり、伊吹山南麓一帯は、京極氏の近江における本拠地として重要な地域であった。

上平寺館や高殿地区、城下町は、伊吹山南側斜面を駆け下る藤古川が作り出した扇状地の扇頂部付近にあり、東側は藤古川の急峻な谷、西側は高殿地区がある尾根と、『上平寺城絵図』に「要害谷」と記される天然の要害によって守られている。

この『上平寺城絵図』は、近世になって現地での遺構を忠実に描き、伝承を加味して作成されたと思われる信憑性の高い資料で、山城跡や館跡の現存遺構や道路、地割りなどが現況とかなり合致している。



写真1 『上平寺城絵図』（山城部分）

さて、今回取り上げる上平寺城跡は、別称を菊安（尾）城、桐ヶ城、霧ヶ城などという。名称については、今後の検討を要するものの、ここでは「上平寺城」として報告していきたい（第5章付論参照）。

上平寺城の初見は、『江北記』にみえる次の記事である。「大永三年(1523)三月九日、かりやす尾の御城より御忍にて尾州へ御取退候。大原五郎（高広）殿も御同道候。六崩殿（高慶）はかりやす尾に残し被申候。これは國人浅見氏等の攻撃により落城したことを指している。築城年代については、『改訂近江國坂田郡志』に「浅井三代記に永正六(1509)とあれど確かならず」とあるのみで明らかではない。持清以降、勝秀、政経、高濑と系図上でも混乱の見える15世紀後半代は、京極氏、重臣多賀氏などが入り乱れた内紛が続く。（第5図参照）

高清が、この内紛を収めるのは永正二年(1505)のことで、対立していた京極材宗と和睦して北近江を再び統一する。上平寺城館が整備されたのはこの頃であろう。

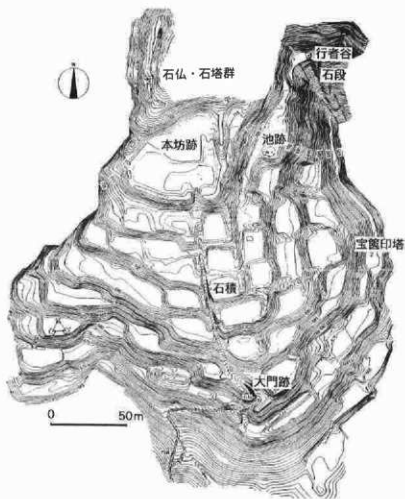
大永三年以降、上平寺城に関する文献は、永禄三年(1560)の「濃州境目かりやす尾と中廻、一両日中濃州ノ城ニ可申付之由風聞候間」(『浅井氏三代文書集』)と、浅井長政が、元亀元年(1570)に織田信長に備えるために上平寺城を改修したことを記した『信長公記』の「去程に浅井備前越前衆を呼越し、たけくらべ、かりやす両所に要害を構へ候」の2点がある。

大永三年の落城以降は、近江と美濃の国境警護の城としての役割を担っていたことが、二つの文献から読みとれるが、元亀元年の改修は、城将である堀・樋口両名が織田に通じていたために、戦うことなく開城している。以後、上平寺城は廃城となったようだ。

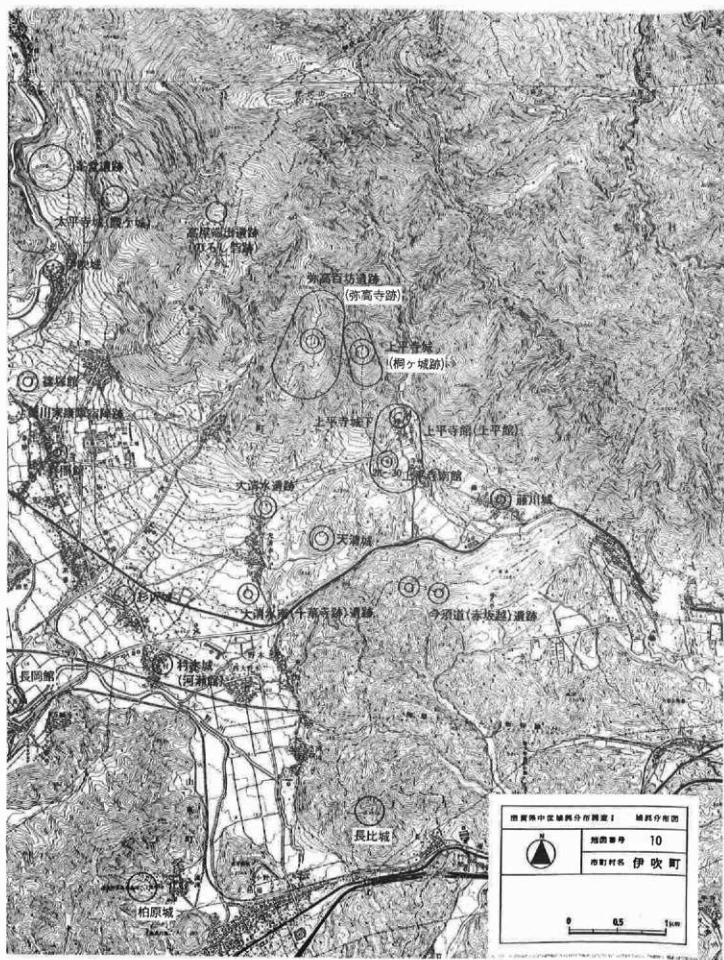
周辺の中世城郭の分布

『滋賀県中世城郭分布調査6』(滋賀県教育委員会)には、伊吹町内の中世城郭20カ所が掲載されている。そのうち半数は、この時の調査で確認された小規模な削平地を持つ砦状の遺構で、文献資料にみえる主な城郭は、村木城・天清城・太平寺城・弥高寺・上平寺城館で、このうち村木城が京極氏被官川瀬氏の平地の居館であるほかは、いずれも山城である。

天清城は清水集落東側の山頂部にある。多賀氏の居館と伝えられているが、堀や土塁など明瞭な遺構はみられない。太平寺城は、京極氏の居城とされているが、現地では中之坊・上乗坊・円蔵坊などの寺院地名と、中央の道をはさんで屋敷跡(坊跡)が並ぶ寺



第2図 弥高寺跡平面図



第3図 周辺の中世城郭分布図（『滋賀県中世城郭分布調査6』に加筆）

院・太平寺の区画が確認できるが、明瞭な城郭遺構は確認されていない。

弥高寺は、伊吹山中の腹標高約700mの高所にある。奈良時代から続く伊吹山山岳信仰の拠点伊吹山寺の中心的寺院であり、中央通路の左右に坊跡を設ける構築方法は太平寺跡と共通する。しかし、明応四年(1495)に京極政高が、翌年に京極高清が弥高寺に布陣している記事が『船田後記』『今井軍記』にあることから城として利用されていたようだ。現実に、「大門跡」と呼ばれる導入部分は、高い土塁を用いて枡形状を呈し、前面に広大な空堀がまわっている。また、本坊跡の背後に巨大な堀切が構築されているなど、明らかに城郭として改修されている部分がある¹。ちなみに、上平寺城跡は弥高寺跡から見下ろされる位置にあり、今回の分布調査では、両者の関係を整理することが課題のひとつである。

さて、本町が属する坂田郡は、美濃との国境であるとともに、南近江の六角氏と北近江の京極氏、浅井氏の国境にもなっており、戦国時代には多くの山城が築かれた。

米原町の鎌刃城・太尾山城・菖蒲嶽城は、彦根市の佐和山城とともに東山道(中山道)を監視する目的で築かれた「境目の城」である。このうち鎌刃城跡については、発掘調査が実施されており、礎石建物や石垣、枡形虎口などが検出されて、近江の築城技術の先進性が改めて確認された²。

一方、美濃との国境では、元龜元年(1570)、岐阜から近江に侵攻を開始した織田信長に対して、浅井長政は江濃國境に「たけくらべ」「かりやす」に要害を構えて迎え撃つ体制を整えた。これは、長比城(山東町)と上平寺城を指しており、いずれも巨大な土塁や堅堀で構築されている。

また、郡内には領主京極氏の柏原館や上平寺館のような北近江の中心地のほかに、京極氏や浅井氏の被官であった国人や地侍が居館を構えている。大原氏館(山東町)は、佐々木信綱の長子重綱が大原荘を与えられた居館で、現在も二方に土塁と堀が残る方形の館跡を見ることができる³。このほか、京極氏の根本被官筆頭今井氏の新庄(箕浦)城(近江町)や、箕浦荘の地頭土肥氏の居館「殿屋敷」などの調査が行われている。

このように、坂田郡は美濃との国境及び南近江との国境を守る位置にあり、また、鎌倉時代以降、京極氏が本拠地を置いた重要な地域であった。

註1 伊吹町教育委員会 1986 『弥高寺跡調査概報』

註2 米原町教育委員会 2001 『鎌刃城跡発掘調査概要報告書』

註3 山東町教育委員会 1992 『町内遺跡 一大原氏館跡・すも塚古墳-』

1993 『町内遺跡 一大原氏館跡・すも塚古墳(第2次)-』

1996 『町内遺跡 一大原氏館跡(第3次)・観音寺遺跡-』

註4 滋賀県教育委員会 1991 『箕浦城・浄蓮寺遺跡』

第2章 調査の経緯

上平寺城跡遺跡群は、近江半国の守護大名京極氏の山城、山麓の居館や庭園、家臣団屋敷群と城下町が良好に残されている遺跡群である。浅井氏の小谷城（浅井町・湖北町）、六角氏の観音寺城（安土町・五個荘町・能登川町）とともに、滋賀県の中世史を解明するうえで欠かすことのできない遺跡であり、全国的にも貴重な城館遺跡である。近年、その重要性が認識され、ようやく研究や調査が進んできた¹。また、江戸時代の比較的早い時期に描かれたといわれている『上平寺城絵図』（伊吹町役場蔵）があり、遺跡群の全貌を知るための資料として重要である。

伊吹町教育委員会では、平成7年度から9年度にかけて城下町地区で約16ヶ所の試掘調査をおこない、柱穴や溝状の遺構、16世紀前半を中心とする遺物などを検出した。また、平成9年度に滋賀県教育委員会がおこなった上平寺南館遺跡（高殿地区）の発掘調査では、土塁や堀切を兼ねた石敷きの道が見つかっている²。

遺跡群内では、城下町地区を中心には場整備事業などが計画されており、協議を重ね盛り土保存などの遺跡保護の対応の中で、最低限の発掘調査を県および町教育委員会がおこなってきた。その結果、石組井戸や大小の掘立柱建物などが検出され、城下町の存在も一部明らかになりつつある³。

このような状況から、広範囲にわたる遺跡群の早急な把握と、今後の保護・活用をはかるために、平成7年度から10ヶ年計画で上平寺城跡遺跡群分布調査を実施することになった。調査は主に地形測量と遺跡内や周辺の踏査、遺物の地表面採集で、年次計画は以下のとおりである。

- ①平成7～9年度 上平寺館跡と京極氏庭園⁴
- ②平成10・11年度 高殿地区（上平寺南館遺跡）⁵
- ③平成12・13年度 上平寺城跡
- ④平成14・15年度 弥高寺跡
- ⑤平成16年度 補足調査・まとめ

上平寺城跡の測量範囲は、城跡の北を区切る堀切から、南端に集中する堅堀群までとした。平成12年度は北端の堀切から、絵図で「本丸」「二の丸」と記されている郭群までとし、平成13年度に、残る「三の丸」に該当する郭から、南端の堅堀群までを測量した。また、東西は、できるだけ堅堀の端までを凶化するようにした。この結果、測量範囲は南北約450m、東西最大幅約150mを測る。

ここでは、測量調査の成果を概報として報告することにした。

註1 上平寺城についての研究には下記がある。

長谷川銀蔵・博美 1985 「上平寺城」（『近江の城』16）

小和田哲男 1985 「京極氏の内江と上平寺城」（『近江の城』16）

- 小島道裕 1989 「上平寺城下について」(『近江の城』34)
小島道裕 1997 「第2章城下町 3 上平寺城」(『城と城下』新人物往来社)
中井 均・高橋順之 1994 「上平寺城とその城下」(『近江地方史研究』29・30)
中井 均 1997 「知られざる山城・上平寺城」(『近江の城 城が語る湖国の戦国史』
サンライズ出版)

- 註2 滋賀県教育委員会 2000 『上平寺南館遺跡』
註3 伊吹町教育委員会 2001 『上平寺遺跡・寺林遺跡』
註4 伊吹町教育委員会 1998 『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅰ 上平寺館跡』
註5 伊吹町教育委員会 2000 『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅱ 高殿地区』

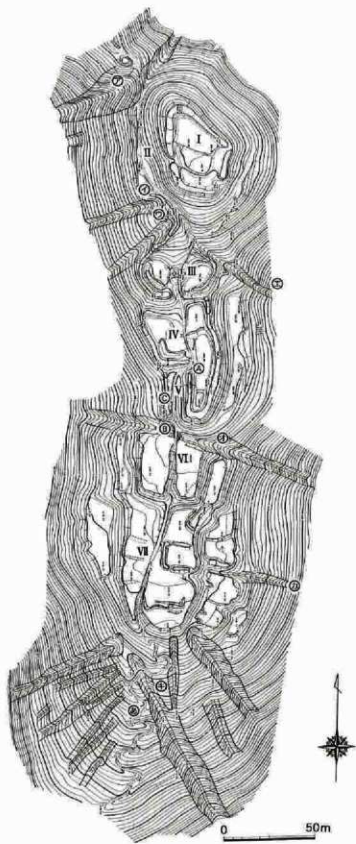
第3章 調査の結果

平成5年以前の上平寺城跡は、標高669mという高所に加えて、雑木に覆われ、全城熊笹と茨が繁茂するブッシュであった。また、山麓上平寺からの登山道はほとんど使われることなく、西尾根の弥高寺からのルートはすでに消滅していた。さらに、熊の出没もあり、近づこうとする研究者を阻んできた。伊吹町教育委員会では、平成2年から県指定史跡弥高寺跡の主要遺構と遊歩道の確保を目的に刈り払いをおこない、平成5年から上平寺城へのルート開拓と整備を順次おこなって、ようやく主郭に達したのは平成7年のことであった。以後、主郭から思い切った雑木の伐開を行い、平成13年、東西の腰郭と最南端の巨大な堅堀の刈り払いで、ほぼ全体の遺構確認を終えることができた。また、この間平成11年には、山麓上平寺館からの登山道の刈り払いをおこなった。これらの作業により、ようやく上平寺城の全貌をつかむことが可能となり、今回の測量調査をおこなうことができた。

さて、測量成果からみた上平寺城の構造については、第5章で中井均氏に詳細な検討と、元亀元年(1570)の改修を中心に築城主体の考察について論考をいただいているので、そちらを参照いただきたい。

若干重複するが、ここでは各遺構の規模を中心に述べていきたい。なお、各遺構の記号Ⅰ～Ⅶ、ア～キ、A～Cは第5章と共通している。

上平寺城跡は、馬の背状の細い尾根に、一番北の主郭Ⅰを頂点にして、主な曲輪Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶが順に並び、各曲輪の間に堀切や堅堀を有効に配して防衛性を高めている。城跡の北を区切る堀切アは、上場の幅約5～24m、深さ約7mで東西ともに深い堅堀となっている。主郭Ⅰは南北約50m×東西約35mで、周囲に幅約2～5mの土塁を巡らせている。西側に取り付く帯郭Ⅱからの比高は約10mある。主郭Ⅰと曲輪Ⅲの間には、西側に堅堀イ・ウがあり、東側にはエがある。ともに上場の最大幅約8mあり、深さは約2mを測る。イ・ウの頂点には幅約2mの土塁が構築されており、曲輪Ⅲの西側の土塁に続く。曲輪Ⅲは約30×15mを測り中央の道で二分されている。ⅣはⅢとともに土塁囲いの曲輪で、虎口Aと



第4图 上平寺城跡測量圖

第4章 まとめにかえて 一京極氏の居城と上平寺城の位置付け一

ここでは、まず、京極氏の事歴について概要を記し、その時々京極氏の拠点について推察してみたい。

仁治二年(1241)、近江守護佐々木信綱は4人の息子に近江の所領を分配した。この時、愛知川以北六郡の北近江を与えられた四男氏信が京極氏を名乗り初代となる。

鎌倉時代の京極氏は、鎌倉の桐ヶ谷に邸宅を構え、京都では京極高辻に邸宅を設けていた。氏信は鎌倉御家人であるとともに、検非違使として朝廷方にもついて御所や院の警護を担当していた。このことから、鎌倉時代から室町時代の京極氏は、京都を拠点に活動していたと考えられる。特に、南北朝期の京極氏当主は高氏で、建武三年(1336)京極家として初めて守護(若狭国)に任ぜられ、宗家六角氏(近江守護)と肩を並べると、南北朝内乱、観応文和の乱、明德の乱などで、幕府の主力として転戦し、近江国内でも六角氏を圧倒していく。その子高秀以降も、高氏という傑物が築いた家格と権勢を維持し、幕府内の政治的立場と分国北近江の経営を着実に進展させていった。

応仁の乱(応仁元年=1467)で東軍細川方に属した京極持清は、南近江の六角高頼が西軍に属したことから、居城観音寺城を攻める。これ以降、領国近江における戦乱が繰り返されることになる。しかし、持清の死後、京極家は分裂し、京極孫重子丸(高清か)と政経の対立に、有力家臣多賀氏の内紛が絡み、将軍家および六角氏や隣国美濃の斎藤氏の介入などがあり、内訌期と呼ぶべき状態が続く。このことを示すように、持清から高清までの系図には種類によって混乱が見られ、高清を持清の子として政経・政光らの弟とするものと、勝秀の子とするものの二説がある。

高清は、明応八年(1499)政経の子材宗を破り、永正二年(1505)に材宗と日光寺(近江町)で和睦している。さらに、永正五年(1508)近江一國守護となることで、再び北近江を統一することができた。これには、有力家臣上坂氏の助力によるところが大きかったが、大永三年(1523)この上坂信光の専横を打倒するために、浅見・浅井・三田村・堀などの國人が上平寺を攻め、信光と高清・高慶親子を追放して、高延を擁立した。以後、高延(高広・高慶(高佳・高吉)の争いにより再び京極氏は分裂し、浅井氏が台頭することになる。文書による検討から、高吉は天文二十年(1551)頃まで、坂田郡南部で政権を保っている。しかし、永禄三年(1560)愛知郡野良田で六角氏とともに浅井長政に敗北するなど、北近江における政権は浅井氏に取って代わられることになる。

高吉は、京極家の再興を賭けて子高次を織田信長に託し、高次は軒余曲折の末、近世大名京極氏として高吉の夢を果たすことになる。

以上、中世京極氏の流れを概観してみたが、これを簡略にまとめると、以下のような各期に分けることができないだろうか。

①初期(氏信～宗氏)

中央では検非違使や幕府の要職・引付衆などを歴任し、北近江では館・菩提寺建立

など、京極政権の足がかりをつくった時期

②興隆期（高氏～持清・勝秀）

高氏（導譽）以降、宗家六角氏をしのぐ時期。近江が南北の分郡守護体制となり、時に近江一國守護のほかに出雲・隠岐・飛騨等の守護となった時期

③内訌期（政経・高清）

勝秀の急死と持清の死後、一族・有力家臣の内紛が続いた時期

④再建期（高清）

材宗と講和し、北近江を再び統一した時期

⑤衰退期（高広・高吉）

浅井氏の台頭により北近江の政権が、京極氏から浅井氏へ移行した時期

それでは、①～⑤の各期において、京極氏の北近江における拠点はどこであったのかを検討したい。

〔初期の居城〕

『滋賀県中世城郭分布調査6』によると、氏信の居館であった柏原城は、現在の山東町清滝にある清滝寺周辺をこれに当てている。柏原庄の地頭であった柏原弥三郎が長に悪行があり、その追討に功があった佐々木氏に居館が与えられたという。高氏（導譽）も、「柏原城＝閑居」「柏原城＝籠ル」（正平八（1353）年）などの記述があり、居城としての機能を持っていたことがうかがえる。

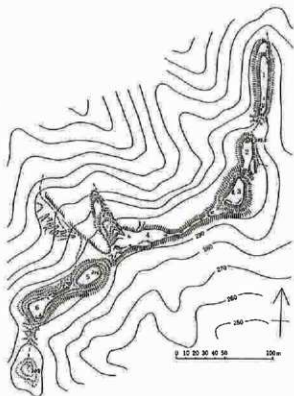


伊吹山の中腹にある太平寺城は、一般に京極氏の居城として認識されているが、険峻の地であることから、別に交通上の要地である柏原に館を設けたと考えられる。しかし、平地と隔絶した標高450mの天険と、山岳寺院施設の存在や聖地性、同じ伊吹山中腹の弥高寺が、時に応じて京極氏代々に利用されていることなどを合わせて考えると、太平寺城も山岳寺院を利用した南北朝期の京極氏の城郭として考えるのが妥当であろう。居館としての柏原城、戦時にたてこもるための城として利用された太平寺城という構図が、この時期の京極氏の居城の在り方かもしれない。

第6図 柏原城跡地形図

〔興隆期の居城〕

高氏が甲良荘の勝楽寺城（犬上郡甲良町）に館を移すのは、建武四年(1337)のことである。この頃京極氏の発展は頂点に達し、宗家六角氏をしのぐまでになっていた。前年、若狭と北近江の半国守護に任ぜられ、建武五年には京極氏として初めて近江一国の守護になる。このようなときに、近江の北東端の柏原よりかなり南で、六角氏の勢力圏に近い勝楽寺に築城したのである。では、勝楽寺城の存続がいつまでであったのか。導誉の子高秀は幕府内で甲良殿と呼ばれていた。導誉の孫・高詮も甲良殿の名を継いでいる。一方で、鎌倉幕府滅亡から南北朝期にかけての六角氏当主は氏頼で、終始庶家京極氏に押されていた。以後も、文安の内訌(1444～6)をはじめとする内部抗争で弱体化の道を歩む。



第7図 勝楽寺城跡縄張り図

勝楽寺城は、六角氏の弱体化をついて、近江一国支配を目指す拠点として南進したものであろう。ただし、勝楽寺城の縄張りやその山麓遺構をみると、近江ほか数カ国の守護であった京極氏の拠点としては脆弱な感が否めない。勝楽寺築城後も高氏が何度か柏原城を利用していることが文献に見え、孫高詮らの菩提寺が清滝寺周辺にあったことから、柏原館や太平寺城の機能は維持しながら、湖東の平野部に居館の整備を目指したのではないだろうか。

〔内訌期の居城〕

持清の死後、跡目相続争いにより京極家は分裂した。逆に、六角氏は高頼が当主となり、近江における勢力を盛り返すという状況になる。少なくともこの時点で、勝楽寺城は京極氏の居城としての役割を終えているのではないだろうか。この頃、文献に見える京極氏関連の城郭は、敏満寺（多賀町）・弥高寺（伊吹町）・桃原城（多賀町）などで、いずれも山間の険峻や山岳寺院を利用した山城である。弥高寺については、明応四年(1495)に「江州大守佐々木政高（政経）進二師干彌高山-」「政高下三彌高山-」（『船田後記』）とあり、翌年には「中務少輔（高清）殿彌高にまします御時」（『今井軍記』）という記事がある。対立する政経と高清が、相次いで利用していることがわかる。北近江の政権混乱の中では、本来本拠地であった伊吹山麓ですらその役割を果たせなかったことがうかがえる。

〔再建期の居城〕

上のような状況の中では、氏信以来の居館であった柏原館も荒廃していたことが予想される。上平寺城館の整備は、再び北近江を制した高濑が、本拠地伊吹山麓の要害地を選び、北国脇往還を取り込んで、新しい拠点とすべく築城に取り掛かったものであろう。すでに利用されていた山腹の弥高寺および上平寺城を、結めの城として城塞化する。藤古川の谷と外堀、有力被官の屋敷を配した尾根で城下町を取り込み、御館には、巨大な庭園を築いて幕府の公権力をこの地に具現化する。今も残るこの庭園遺構は、高濑の北近江支配への意欲と権勢を物語る。

〔衰退期の居城〕

しかし、大永三年(1523)のクレータによる上平寺城落城で、高濑の意図はついで、上平寺は北近江支配の拠点としての役割を終じる。家臣団屋敷を含む城下町部分はおそらく廃絶し、山城は、のちに江濃国境警護の城として元亀元年(1570)まで機能する。上平寺館は、『寛政重修諸家譜』の中で、元亀元年に高吉が再び入っていることが記されているが、隠棲地としての館であろう。

太田浩司氏の研究では、上平寺落城後の京極高広段階でも、坂田郡南部を中心に天文年間後半まで京極政権が機能していたと考えられている。この頃の拠点は、「郷野文書」(『改訂近江國坂田郡志』所収)の山田清氏書状などに当主高広の居所地として登場する河内城(山東町)が、最も有力視されている¹。

以上、あくまでも推論であり、上平寺城の位置付けをはじめ、今後さらに文献資料や考古学的な検討などにより明らかにするべき課題は多い。いずれにせよ上平寺城館は、始祖氏信から永く京極氏の本拠地であった柏原館と決別して、新たな京極政権樹立を目指す高濑が築城整備した、北近江最初の守護館と城下町であるといえる。

註1 太田浩司 2000 「戦国期の京極氏家臣団 文献史学からの考察」(『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅱ 高殿地区』)

〔主な参考文献〕

- 坂田郡教育会 1941 『改訂近江國坂田郡志』第3巻
小和田哲男 1972 『近江浅井氏』(新人物往來社)
小和田哲男 1985 「京極氏の内訌と上平寺城」(『近江の城』16)
滋賀県教育委員会 1983～1992 『滋賀県中世城郭分布調査報告書』1～10
西村静雄 1985 『佐々木京極氏と近江清滝寺』
山東町 1991 『山東町史 本編』
宮島敬一 1996 『戦国期社会の形成と展開』(吉川弘文館)
伊吹町 1998 『伊吹町史 通史編上』

表1 京極氏関連年

年	事 項	居 城	近江北郡守護	近江守護
1241(仁治2)	近江守護佐々木信綱、4人の子に近江の所領を分配する 長子重綱に坂田郡大原荘(大原氏)、次子高信に高島郡田中庄(高島氏)、三男泰綱に佐々木荘の館と愛知川以南六郡(六角氏)、四男氏信に愛知川以北六郡(京極氏)を与える 氏信が柏原に館を構える	柏原館		
1265(文永2)	氏信、鎌倉幕府評定衆になる			
1286(弘安9)	氏信、清滝寺を菩提寺にする			
1322(元弘2)	高氏(道兼)、後醍醐天皇隠岐島配流の警護に当たる 北島具行を柏原で処刑する			
1333(元弘3)	高氏、足利尊氏に与し北条氏を討つ(鎌倉幕府滅亡)			
1336(建武3)				
1337(建武4)	高氏、甲良荘に館を移す	勝楽寺城	建武3 高氏2	六角氏頼 建武5 高氏
1338(建武5)	高氏、近江一國守護になる		建武5 頼忠2 高氏	六角氏頼 六角直綱 他
1389(暦応2)				
1352(文和元)	高詮、出雲・隱岐・飛騨の守護になる			
1353(文和2)				
1370(応安3)	高詮、近江一國守護になる		文利2 高秀38	応安3 高詮 永和3
1377(永和3)				
1391(明德2)				
1401(応永8)				
1413(応永20)				
1431(永享3)				
1432(永享4)				
1439(永享11)				
1441(嘉吉元)	高致、將軍義教とともに赤松満祐に暗殺される(嘉吉の变) 持清、近江半国と出雲・隱岐・飛騨の守護になる			
1467(応仁元)	持清、応仁の乱で東軍に属し、六角高頼の高瀬城を攻める 持清の子・勝秀、六角氏の観音寺城を攻める(六月勝秀没)	柏原館か		
1469(文明元)	持清、観音寺城を攻め落とす 持清、近江一國守護になる			
1470(文明2)	持清の臣・多賀高忠、観音寺城など六角氏の城を攻める			
1471(文明3)	持清の孫・孫童子丸(高清力)が四力国の守護になる 多賀高忠、六角龜寿(高瀬)を攻める			
1472(文明4)	幕府、政経(高政)に坂田・浅井・伊香三郡の所領を安堵			
1473(文明5)	美濃の斎藤妙椿、六角高瀬を助けて多賀高忠を越前に送る			
1475(文明7)	政経、近江一國守護になる 一家督争いのはじまり 多賀高忠、山門衆徒とともに六角行高を攻める			
1478(文明10)	高忠、斎藤妙椿と戦う			
1486(文明18)	多賀宗直、高清を敏満寺に攻め、高清は甲賀郡に逃れる	内江 虹期		
1487(長享元)	宗直、美濃から月ヶ瀬城に入り挙兵する			
1488(長享2)				
1490(延徳2)	將軍義村、政経に高清討伐を命じる。高清敗れて坂本に逃げる 政経、近江一國守護になる			
1491(延徳3)				
1492(明応元)	將軍義隆、政経を廃し高清に京極家の惣領職を継がせる			
1493(明応2)	美濃の斎藤利国、高清を擁して北近江に入る			
1495(明応4)	高清、今井秀遠らと戦う			
1496(明応5)	高清、六角方の伊庭貞隆を討つ 斎藤利国六角氏を攻める。斎藤親子自刃、高清海津に流寓する			
1499(明応8)	高清、政経の子・村宗を破り北近江を保つ			
			各名前の右の数字は在任期間	
			明德2 高詮10 応永8 高光12 応永20 持高18 永享3.9~11高致 永享4 持高7 永享11 高致2 嘉吉元	六角高頼 六角高頼 六角持綱 六角久頼 六角高頼 六角政亮 他
			持清29	
			文明2.9 孫童子丸1 文明3 閏8	文明2.8 孫童子丸 文明3 閏8 六角政亮
			政経7	文明5.9 政経
			文明10.10 高清8	?
			文明18.9 長享元11 政経1 長享2.11 高清	六角高頼 他
			延徳2.8 政経1	延徳2.8 政経
			徳3.12	
			明応元12	
			高清28	六角八郎 六角高頼 六角氏綱

年	事 項	居 城	近江北郡守護	近江守護
1501(文龜元)	材宗、美濃より近江に入り高清と今浜で戦う	上平寺城	永正17.2	永正5.6 高清カ 六角氏綱 六角定頼 六角義賢
1505(永正2)	高清、材宗と和睦し北近江を統一する(日光寺の講和)			
1508(永正5)	高清、近江一國守護になる			
1520(永正17)	高慶(高古)、高清の名代として将軍義晴の御代始を賀す			
1521(大永元)	浅見氏ら国人が上平寺を攻め、高清は鬼張に退く			
1523(大永3)	浅井亮政、浅見氏に反して高広(高延)を小谷城に迎える			
1525(大永5)	高清、北近江に復帰する			
1526(大永6)	高清、北近江に復帰する			
1534(天文3)	浅井亮政、小谷城で高清・高広親子をもてなす			
1535(天文4)	高広、浅井亮政とともに多賀貞隆を攻める			
1538(天文7)	高清没し、高広が継ぐ	河内城		
1541(天文10)	高広、六角定頼の兵と上坂表で戦う			
1542(天文11)	高広、浅井亮政と戦う			
1542(天文11)	高広、高慶とともに浅井氏を攻める			
1544(天文13)	高広、浅井亮政の臣・園友伯耆守を破る			
1549(天文18)	浅井久政、高広と和議を結ぶ			
1550(天文19)	高広・久政、南近江の六角氏を攻める(～1553)			
1552(天文21)	高広、六角氏の佐和山城を落とす			
1559(永祿2)	高慶、六角義賢に關し、浅井氏に対し挙兵する			
1560(永祿3)	浅井長政、美濃斎藤氏に対抗して上平寺城を攻める 高慶、六角氏とともに愛知郡野良田で浅井長政と戦い敗れ、清庵に隠棲する			
1568(永祿11)	六角氏、織田信長に攻められて滅亡	(上平寺館)		
1570(文龜元)	浅井長政、織田信長に対抗するために上平寺城を改修 高慶、上平寺で隠棲する			
1573(天正元)	浅井氏滅亡			
	高次、五千石を与えられ京極氏の旧臣をまとめる			

- 【参考文献】 小和田哲男 1972 『近江浅井氏』(新人物往來社)
- 今谷 明 1986 『守護領国支配機構の研究』(法政大学出版局)
- 山東町 1991 『山東町史 本編』
- 宮島敬一 1996 『戦国期社会の形成と展開』(吉川弘文館)
- 伊吹町 1998 『伊吹町史 通史編上』

第5章 付論

上平寺城跡の構造

— 特に元龜元年の改修を中心に —

米原町教育委員会 中井均

1. はじめに

上平寺城跡は佐々木六角氏とともに近江守護にも任せられた佐々木氏の庶流京極氏の居城として著名である。その形態は標高669.0mに位置する詰城部分とその南山麓に位置する居館部分からなる典型的な中世城郭である。

今回、伊吹町教育委員会による測量調査が実施され詳細な遺構図が作成された。本稿では、この成果について若干の考察を行うものである。

ところで、上平寺城跡の名称であるが、城郭が存続していた時代の史料にその名を見出すことはできない。『江北記』では「大永三年三月九日 かりやす尾の御城より御忍にて尾州へ御取退候。」とあり、かりやす尾城と呼ばれていたことがわかる。さらに、『信長公記』元龜元年（1570）6月条には、「たけくらべ、かりやす両所に要害を構へ」と記されている。また、後世の資料でも、例えば「上平寺城古図」（伊吹町所蔵）は江戸時代初期に描かれた絵図であるが、そこでも「蒭安尾城」と記されており、別名として、京極氏の祖、氏信が鎌倉の桐ヶ谷に邸を設けたことに由来する「桐（霧）ヶ城」とも記されているが、上平寺城の名称は見えない。さらに明和七年（1770）、深井彪によって編纂された『諸国廢城考』でも「蒭安城」と記されている。

ところが、近世の地誌『近江輿地志略』では「上平寺は伊吹八箇寺の内也、真言宗也。門前の在家十軒許、西北の尾上に京極の居城の跡あり、上平殿といふ。天守の土台石垣今に歴然たり。」と記されており、上平寺という寺院の存在を記し、城跡については上平殿と称している。

また、『江州佐々木南北諸士帳』には「伊吹山刈安上平寺城主江北太守」とあるほか、『寛政重修諸家譜』の「京極家譜」では「（元龜元年）十一（二）月右府、浅井・朝倉と和睦のち高吉も上平寺城にかへる、」とある。

つまり、城が存続していた段階ではかりやす城、あるいはかりやす尾城と呼ばれていたようであり、近世の地誌で初めて上平寺城の名称が登場するようである。しかも、上平寺城についても本来は伊吹山寺に関わる上平寺という寺院名であり、その寺院を利用して築城されたことにより、上平殿と称されたのが後に上平寺城と呼称されるようになったようである。

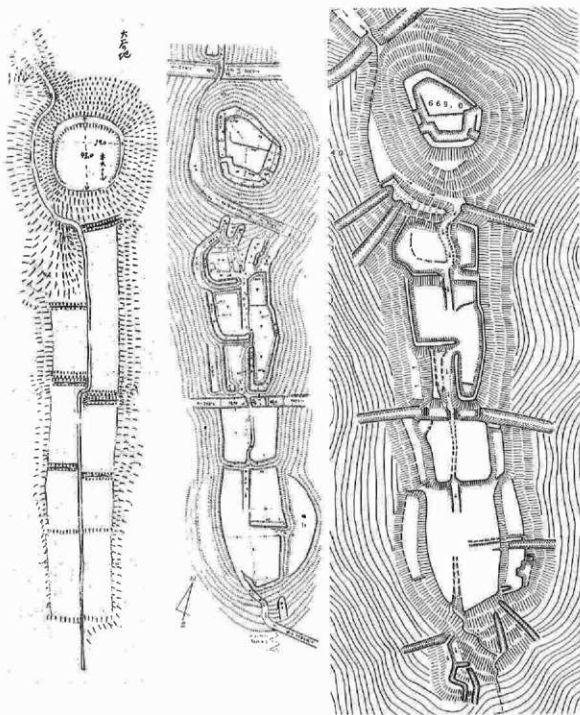
さらに地元では上平寺城とは呼ばれておらず、「キリガジョウ（桐が城）」と呼ばれるのが一般的であった。

こうしたことから本来蒭安城跡あるいは桐ヶ城跡とすべきであるが、現在の研究ではほ

ば上平寺城跡の名称が定着しており、ここで蒞安城跡・桐ヶ城跡に改称すると、かえって煩雑で混乱をまねく恐れがあり、本稿でも上平寺城跡を用いることとした。

2. これまでの研究

近江守護佐々木六角氏の本城である観音寺城跡、湖北の戦国大名浅井氏の本城である小谷城跡はいずれも大規模な戦国期城郭として全国的にも著名である。それらに比べて北近



第8図 上平寺城跡縄張図の変遷
(左から本邦築城史編纂委員会図、長谷川銀蔵・博美図、中井・高橋図)

江の守護京極氏の本城である上平寺城跡は史跡の指定も受けておらず、訪れる人も少ない。これは上平寺城跡が非常に高い山に所在し、熊笹に覆われ、熊も出没するという悪条件が人の来訪を妨げていたためと考えられる。

近代になってこの上平寺城跡を初めて紹介したのは、『日本城郭史資料』であろう。『日本城郭史資料』とは、昭和8年に陸軍の築城本部内に設置された「本邦築城史編纂委員会」が調査したわが国の城郭に関する手控稿本である。編纂を終えた正本は印刷を待つばかりであったが、昭和20年の東京大空襲によって焼失してしまった。この『日本城郭史資料』は全42冊におよび、現在国立国会図書館に所蔵されている。その第22冊「近江」のなかに上平寺城跡の略測図が掲載されており、これが上平寺城跡についての最も古い測量図であると考えられる。昭和十年代に作成されたものと推定されるが、形状は正確に描かれており、当時の軍の調査レベルの高さを窺い知ることができる。ただ、残念ながら調査時間が足りなかったのか図面は途中で終わっており、全体像は明らかにされなかった。

敗戦後、城郭研究自体に長い沈黙の時代が続き、特に中世城郭は構造を研究するのではなく、城主の歴史や合戦の歴史のみが語られることとなった。こうした状況のなかで、滋賀県内では、長谷川銀藏、博美父子による精力的な踏査がおこなわれ、構造の把握に努められた。むろん個人的になされた調査であり、その姿勢は高く評価されるものである。この長谷川父子による上平寺城跡の踏査概要図は1985年に刊行された、『近江の城』第16号によって公表された。この図の公表によってようやく上平寺城跡の構造が把握できるようになったのである。ただ、長谷川父子は上平寺城跡の西側尾根に所在する弥高寺跡を上平寺城跡とし、「上平寺城古図」に記されている本城跡も、この弥高寺跡の地に比定されている（長谷川銀藏、博美 1985）。

上平寺城跡を知る重要な絵画資料である「上平寺城古図」は永らく長浜市の個人が所蔵されていたが、近年伊吹町の所蔵となり、研究、活用に利便が図られるようになった。この絵図に記された内容と現状遺構とを比較検討し、さらには現状の遺構が京極氏の詰城の遺構ではなく、『信長公記』に記された元亀元年の「苅安尾城」であることを明らかにしたのが中井均、高橋順之である。2人は城跡の南端尾根筋に堅堀が存在することもはじめて図示している（中井・高橋 1994）。

こうした研究の深化に伴い、上平寺城跡の存在も広く周知されるようになってきた。加えて伊吹町教育委員会の毎年の草刈りにより、それまで来る人を拒んでいた城跡もようやくその全貌が見学できるようになった。

3. 上平寺城の歴史

上平寺城と京極氏の歴史については、第4章表1で高橋順之が簡潔にまとめており、大変利用しやすいので、詳細については参照されたい。ここでは構造を分析するために必要な事項のみ簡単に触れておきたい。

上平寺城の築城は京極高澄と材宗とが講和した永正二年（1505）頃に高澄が京極家の総領として築いたものと考えられている。しかし、大永三年（1523）には京極氏の内訌から焼失し、廃城となってしまった。つまり京極氏の居城としてわずか18年間余りしか機能していないのである。

ところが、前稿（中井・高橋 1994）でも述べた通り、上平寺城は京極氏の居城として廃城となった後、約40年後に再び山城として機能することとなる。『浅井氏三代文書集』に、「長政六 若宮文書（永禄三年：1560）十二月十二日」として「濃州境目かりやす尾と申起、一両日中ニ濃州ノ城ニ可申付之由風聞候間」とあり、六角義賢が美濃の斉藤義龍に浅井賢政（長政）を後方より攻めさせるために、かりやす尾に城を築かそうとした。賢政はこの風聞に接し、いち早くかりやす尾の城を攻めたものである。京極氏の結城の性格から近江・美濃の国境を警備する境目の城としての性格へ変化したわけである。

『信長公記』元龜元年（1570）6月条に「去程に浅井備前越前衆を呼越したけくらべ、かりやす両所に要害を構へ候。信長公御調略を以て堀、樋口、御忠節仕るべき旨御請なり。六月一九日、信長公御馬を出だされ、堀、樋口謀叛の由承り、たけくらべ、かりやす取物も取敢へず退散なり。」とあり、浅井長政が築城したことが記されている。この年、浅井長政は織田信長との同盟を破棄し、朝倉義景方に内応した。越前で信長を討つことができなかつた長政は信長領である美濃との国境を警備するために苅安城と長比城（坂田郡山東町長久寺）を構え、坂田南郡の土豪で、鎌刃城主堀秀安とその一族で重臣の樋口次郎左衛門を入れ置いたのである。

この築城にあたって注目すべきは長政が越前衆、つまり朝倉義景軍の援助を得て普請されたことである。自領内の築城に他の大名の力を得るということは浅井軍の築城技術が劣っていたことを窺わせるとともに、兵力に優勢な朝倉軍が動員された結果であった（中井 2001）。

美濃からの織田軍進攻を阻む境目の城として改修を受けた上平寺城であったが、守備隊の内応により、戦わず織田軍の手中に落ち、以後廃城となった。

4. 測量成果からみた上平寺城の構造（第4図参照）

さて、上平寺城跡の構造については前稿（中井・高橋 1994）でも述べたところであるが、今回の測量図をもとに今一度分析しておきたい。

城跡は伊吹山より南に派生する、刈安尾と呼ばれる尾根の先端に構築されている。標高669.0mの山頂に主郭Ⅰを置く。主郭Ⅰの周閉には低い土塁が巡らされ、さらに曲輪内部は3段に構築されている。虎口は東西2箇所認められ、3段に段築された一番南側の段は両虎口からの進入路として構築されたようである。この主郭Ⅰの周囲の切岸は非常に高いうえ、急傾斜となっている。これは主郭が最も尾根筋に近い位置に配されたためである。

この尾根筋を防御するために尾根を切断する巨大な堀切⑦が設けられている。⑦の中央には土橋が架けられ、東西の両斜面へは堅堀となって尾根を遮断している。

㊦の土橋を渡ると主郭の切岸直下に設けられた帯曲輪Ⅱに入る。この帯曲輪Ⅱは尾根筋から曲輪Ⅲへの連絡路としても機能しており、敵が侵入してきた場合は曲輪Ⅲへ取りつかせないように2本の堅堀㊦・㊧と東端に堅堀㊨が設けられている。

曲輪Ⅲは主郭Ⅰの南側に配されており、三方に土塁を巡らせている。その南側に一段低く曲輪Ⅳがある。この曲輪Ⅳの周囲には高く厚い土塁が巡らされており、本城跡中で最も見ごたえのある遺構となっている。特に圧巻は虎口㊩の構造である。南方より曲輪Ⅳに至るには堀切㊪に設けられた土橋㊫を渡って虎口㊩に進入するわけであるが、その間に外升形空間Ⅴを通過しなければならない。このⅤは曲輪Ⅳの土塁から常に横矢がかかるとともに正面の土塁からも攻撃を受けることとなる。しかも西側にも土塁があるため、縦列でしか攻められないようになっている。

曲輪Ⅳの南面は曲輪Ⅵとの間に堀切㊬が掘られており、東西斜面に対しては堅堀となっている。この堀切㊬で興味深いのは堀切が堅堀となる傾換点の堀底に土橋状の土塁が設けられていることである。おそらく堅堀を登ってくる敵に対する仕切の土塁と考えられる。

ところで、堀切㊬より南側にはまだ曲輪が続くが、それらの曲輪は土塁囲いとなっており、この堀切㊬によって明らかに曲輪機能に格差の存在することがわかる。その曲輪Ⅵであるが、東西にそれぞれ腰曲輪を伴っている。その南側に一段低く設けられた曲輪Ⅶは本城跡中最大の面積を有する曲輪である。従来の調査ではこの平坦面のブッシュが激しく、単調な平坦面ではしか捉えられなかった。今回の測量調査ではさらに曲輪内に段差が設けられていたり、方形に巡らされた低土塁の存在が確認された。こうした遺構の存在から陣城のなかでも兵の駐屯場所として機能していた可能性が高い。曲輪の東西両側には曲輪Ⅵと同様に腰曲輪が設けられている。このうち東側の腰曲輪は堅土塁と堅堀㊭によって仕切られており、特に南側部分はさらに一段下へ取り付く小削平が認められ、虎口の可能性がある。

さて、今回の測量調査では、前稿(中井・高橋1994)で「南側斜面には堅堀がいびつではあるが放射状に設けられている。」として存在は報告していたが、必ずしも実態を十分に把握できなかった南端斜面の堅堀群の存在を明確にした意義は大きい。堅堀群㊮は、11条からなる堅堀群で、途中で1本になったり、逆に途中で枝別れて2本になるなど、やや統一性には欠けるが、ほぼ南端斜面を放射状に巡らせており、尾根先端防御をしっかりとこなっている。また、この堅堀群の間に城道㊯が折れ曲がりながら山麓へ続いている。この城道㊯は「上平寺城古図」に描かれた、七曲に相当するもので、山麓居館と山城を結ぶ大手ルートであったと考えられる。

5. 考 察

今回の測量調査によってほぼ上平寺城跡の全貌が明らかにされた。ここで、明らかにされた上平寺城跡の構造について若干の考察をおこなってみたい。

前稿(中井・高橋1994)では、外升形虎口㊩の構造や、土塁囲いといった点から残存する遺構は京極氏のものではなく、「信長公記」に記された浅井長政が構築したかやす

の要害の遺構であることを明らかにした。そこには若狭地方における朝倉氏築城の障城として位置付けられる中山の付け城跡や、あるいは国古城跡の出丸などに認められる巨大な土塁や虎口構造との共通性よりその築城主体も『信長公記』にある「越前衆」であると考えた(中井 2001)。

今回は南端で確認された放射状の堅堀群を検討することによって、さらに築城主体を絞り込んでみたい。堅堀群についてはほぼ全国的に分布することが明らかにされており(村田修三 1987)、特に戦国大名の特徴を示すものではないようである。ただし、そうした分布において近江は堅堀群がほとんど認められない地域であることは注目してよい。江南の六角氏はその被官の城も含めて堀切もあまり用いられていない地域であり(中井 2002)、堅堀群といった防衛思想は持ち得なかったと考えてよい。江北の京極氏、浅井氏の諸城についても単体の堅堀は存在するものの堅堀群はほとんど認められない。

現在、県内で堅堀群と認識できるのは勝楽寺城跡(甲良町)、布施山城跡(八日市市)、鎌刃城跡(米原町)、清水山城跡(新旭町)程度である。さらにこれらの諸城の堅堀群は非常に不鮮明でいびつであり、明らかに上平寺城跡で確認された堅堀群とは同一の築城主体ではない。つまり近江においては今回確認された上平寺城跡の堅堀群は特殊な位置付けができる。

こうした上平寺城跡の遺構を検討するうえで注目できる城跡は県内では小谷城跡の月所丸である。月所丸は小谷城跡で唯一尾根続きで越前へ抜けるルートを防衛する目的で構築されたものと考えられる。小谷城跡では珍しく土塁囲いの曲輪が連続して構築され、先端には二重の堀切が設けられている。さらに斜面には堅堀群が設けられており、しかも独立性が非常に高く、単体で構築されたものと考えられる。小谷城では他に例を見ない構造であり、おそらく元亀元年(1570)直後に対織田信長戦のために防御を強化した際に新たに築かれた出城の性格の曲輪と考えられ、その築城は朝倉氏がおこなったものとみてよい。ふ厚い土塁に囲まれ、堅堀群を設けている点は上平寺城跡の構造と同じであり、やはり上平寺城の築城にも朝倉氏が関与していたことはまず間違いない。

つぎに尾根先端に放射状に設けられた堅堀群の類例を検討しておきたい。福井県のうち越前地方では、村岡山城跡で東方尾根先端部にのみ畷状堅堀群が設けられている。この村岡山城跡は『城跡考』や『朝倉始末記』によると、天正二年(1574)に白山平泉寺と戦った七山家(小原・木根橋・谷・皮合・六呂師・杉山・中野俣の七ヶ村)一揆軍が籠った城と記されている(水野 1980)。しかし、現存する遺構のうち中心部では横堀が巡り、土塁に屈曲がつくのは織豊期に入城した柴田三左衛門勝成による改修とみられる。

福井県のうち若狭地方では後瀬山城跡で、南西尾根先端に堅堀群が集中して設けられている。後瀬山城は言うまでもなく、若狭守護武田氏の本城であり、武田氏滅亡後は織田信長の重臣丹羽長秀が城主となっている。しかし、織豊系の城郭では堅堀群をあまり用いない。このような状況より現存する堅堀群は武田氏によって設けられた可能性が高い(大森他 1989)。

さらに若狭地方では石山城跡からも尾根先端に堅堀群が検出されている。城郭の北東尾根の先端に設けられた堅堀群は巨大な堀切りとうまく組合され、この斜面をつぶしている。他の尾根筋はすべて尾根を切断する堀切のみしか設けられていないのに、この北東尾根だけが尾根筋をつぶしてしまっている点は注目してよい（赤澤 2001）。

岐阜県では菩提山城跡の南端に堅堀群と堀切をうまくドッキングさせた空堀群を見ることが出来る。菩提山城は永禄元年(1558)に岩手氏を滅ぼした竹中重元が築城し、以後竹中氏の居城となった。重元の嫡男が豊臣秀吉の軍師として有名な竹中半兵衛重治である。その子重門は菩提山城を廃し、山麓に陣屋を構えた。このように菩提山城は戦国期後半の最も発達した山城の形態を示している（中井 2002）。

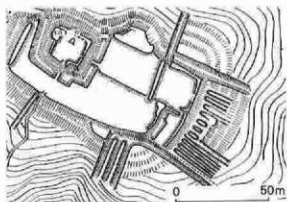
鳥取県では湯谷城跡の北端で斜面に対して平行に巡らされた横堀からほぼ等間隔に設けられた堅堀群が認められる。ここでも北西方向へ延びる尾根では堀切りが連続して設けられているだけで、堅堀群は認められず、尾根筋によって防御形態に差異の存在することがわかる。湯谷城は山陰と山陽を結ぶ日野街道を眼下に見下ろす要衝の位置に築かれているが、城主をはじめその歴史については資料がまったく残されておらず不明である（吉田 1987）。

島根県の山吹城跡では南端斜面が急傾斜であるにも関わらず16条にのぼる堅堀群が連続して構築されている。他の斜面地では堅堀は認められない。城は石見銀山の背後に聳えており、大内氏の銀山開発にともなって築城されたと考えられる。戦国時代には大内、尼子、毛利氏による銀山支配の争奪により山吹城の領有も二転三転する。ただ残存する連続堅堀群は周辺に残る勝山城跡などでも多用されていることから、毛利氏によって構築されたものと考えられる（三島 1987）。

岡山県では篠向城跡で、北西尾根と南西尾根の両先端部にのみ連続堅堀群が構築されている。有力国人三浦氏の支城であったが、天正四年(1576)に毛利輝元に敗れ、宇喜多直家の城となる。しかし、直家が織田信長に内応すると毛利氏が攻め落とすが、直家は直ちに奪還し、以後宇喜多氏の重臣江原親次が入り置かれている。こうした経緯から現存する連続堅堀群は宇喜多氏によって構築されたものと考えられる（八巻 1987）。

岡山県のうち美作地方では医王山城跡で同様の連続堅堀群が認められる。医王山城は南北尾根筋をほぼ一直線に曲輪を配する連郭式の構造を有しているが、その南端に連続堅堀群が認められる。他に派生する尾根筋には、尾根を切断する堀切のみが構築されており、連続する堅堀群はこの部分にしか認められない。南北朝時代に山名氏の支城として築かれるが、現存する堅堀群などは天正七年(1579)から十年にかけての毛利氏と宇喜多氏との攻防戦において毛利氏側が構築したものと考えられる（八巻 1987）。

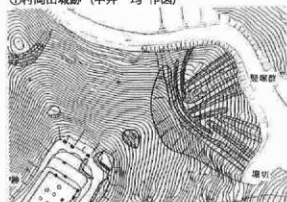
このように尾根先端に連続して堅堀群を設ける事例は数多く存在する。拙稿で検討した事例はあくまでもその数例に過ぎない。さらに今回は西国の事例に集中してしまっただけで、決して意図的ではない。東国でも例えば、新潟県の土沢城跡などをはじめ数多く認められ、いわば連続する堅堀群を用いる地域と同じく汎全国的に分布する防御施設とってよい。



①村岡山城跡 (中井 均 作図)



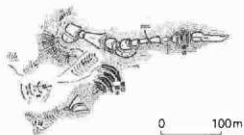
②後瀬山城跡 (参考文献2による)



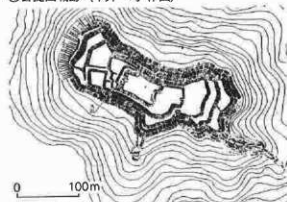
③石山城跡 (参考文献1による)



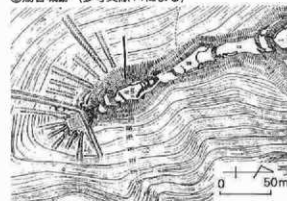
④昔提山城跡 (中井 均 作図)



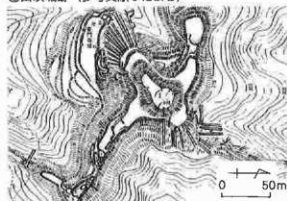
⑤湯谷城跡 (参考文献14による)



⑥山吹城跡 (参考文献9による)



⑦篠向城跡 (参考文献12による)



⑧医王山城跡 (参考文献13による)

第9図 尾根先端に連続堀切をもつ事例

近江は全国的にも連続する堅堀群がほとんど認められない地域である。逆に越前は連続する堅堀群を用いる地域のひとつであり、今回確認された上平寺城の連続する堅堀群は『信長公記』に記された「越前衆」の築城技術として捉えることができそうである。眼下に織田軍が通過するであろう北国脇往還を望む尾根の最先端に、城に取り付けせない防御施設として設けられたものであった。

拙稿でみてきた多くの事例で、連続する堅堀群が尾根の先端のみに構築され、他の斜面地や背後の尾根筋などには掘切しか設けられていない。これは敵の攻撃正面を強く意識していることを示しているといえよう。

6. おわりに

元龜元年、浅井長政は織田信長から離反し、朝倉氏と結んだ。浅井・朝倉氏にとっての勝機は越前金ヶ崎において信長を挟撃する、その一時だけであったといってもよい。しかし、両氏はその機を逸し信長は朽木谷から京都へ戻ることができた。そして信長は居城岐阜へ帰城し、軍勢を立て直して、浅井・朝倉攻めを開始する。今度は浅井・朝倉氏が防戦する立場となったのである。その第一関門として国境封鎖を目的に築かれたのが、たけくらべ、かりやす両要害だったのである。その築城にあたっては浅井氏領内であったにもかかわらず、朝倉氏が築城を担当している。そこには朝倉氏の築城技術の粋が集められた。それこそがぶ厚い土塁で囲まれた曲輪であり、外升形虎口であり、尾根先端に放射状に施された堅堀群だったのであった。

さらにこの国境封鎖をより強固なものにするために、守備隊として入れ置かれたのが、堀秀安と樋口次郎左衛門であった。しかし、この2人が信長方に内応したため両要害はあけなく信長の手落ちてしまったのである。

蛇足ではあるが、鉄壁の城を鉄壁たらしめるのは結局は人なのである。

参考文献

1. 赤澤徳明 2001、「発掘調査された福井県の中世城館 — 戦国時代の朝倉氏系山城を中心として — 」、「織豊期城郭研究会第9回研究会資料 織豊期における戦国大名の城」、織豊期城郭研究会
2. 大森宏他 1989、「後瀬山城 — 若狭武田氏居城の調査 — 」、小浜市教育委員会
3. 高橋順之 1998、「上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅰ 上平寺館跡 — 京極氏の居館跡 — 」、伊吹町教育委員会
4. 中井 均、高橋順之 1994、「上平寺城とその城下町 — 遺構と絵図からの再検討 — 」、「近江地方史研究」第29・30合併号、近江地方史研究会
5. 中井 均 2001、「浅井・朝倉同盟の一考察 — 城郭構造を中心として — 」、「西田弘先生米寿記念論集 近江の考古と歴史」、西田弘先生米寿記念論集刊行会

6. 中井 均 2002、「菩提山城跡」、『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第1冊、岐阜県教育委員会
7. 中井 均 2002、「和田山城跡の構造」、『能登川町埋蔵文化財調査報告書第52集 — 神郷亀塚古墳（1次）・中山古墳群・和田山城跡 — 』、能登川町教育委員会
8. 長谷川銀蔵、博美 1985、「上平寺城跡」、『近江の城 第16号 — 特集・上平寺城 — 』、滋賀総合研究所
9. 三島正之 1987、「山吹城」、『図説中世城郭事典』第三巻、新人物往来社
10. 水野和雄 1980、「村岡山城」、『日本城郭大系』第11巻、新人物往来社
11. 村田修三 1987、「城の分布」、『図説中世城郭事典』第三巻、新人物往来社
12. 八巻孝夫 1987、「篠向城」、『図説中世城郭事典』第三巻、新人物往来社
13. 八巻孝夫 1987、「医王山城」、『図説中世城郭事典』第三巻、新人物往来社
14. 吉田浅雄 1987、「湯谷城」、『図説中世城郭事典』第三巻、新人物往来社

圖 版

上平寺城跡遠景
(藤川から)



上平寺城跡遠景
(大清水から)



上平寺城跡遠景
(弥高寺跡から)





主郭 I (南から)



帯郭 II



曲輪IV



虎口A



曲輪Ⅶ



堀切ア (土橋)



整地イ



堀切才

図版 6



城道あ



堅堀力

報 告 書 抄 録

ふりがな	じょうへいじじょうあと							
書名	上平寺城跡							
副書名	上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	伊吹町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第17集							
編著者名	高橋順之・中井 均							
編集機関	伊吹町教育委員会							
所在地	〒521-0314 滋賀県坂田郡伊吹町春照 37 TEL0749-58-1121							
発行年月日	西暦 2002年3月							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
じょうへいじじょうあと 上平寺城跡遺跡群 (上平寺城跡)	し げ け ん ぎ ぶ け ん 滋賀県坂田郡 い ぶ きの ち ょ う 伊吹町弥高 どう とう 同 藤川	254622	45	35度 23分 30秒	136度 24分 55秒	200010～ 200112	68,000	分布調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項			
上平寺城跡	山林	戦国時代	屋敷跡、土塁		測量調査			

伊吹町文化財調査報告書第17集
 上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅲ
 上 平 寺 城 跡
 2002年3月
 編集・発行 滋賀県坂田郡伊吹町教育委員会
 印刷 立木印刷

